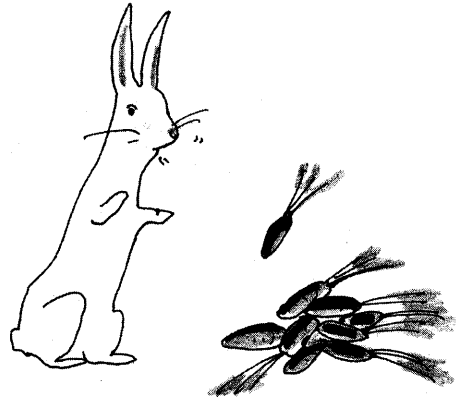


温泉

松井とし



幼児教育の本質をなす部分は、わき上がってくる高まりではないだろうかと思う。外から見ればとらえどころがないように見える幼児教育にも、教育課程や指導計画が存在する。しかし、それらは大人の計画に子どもをはめこんでいくものであってはならない。

ひと昔前「教師は仕かけ人」ということが言われた。より良い環境を工夫し、子どもを上手にのせながら、着実に計画を実践していく力量を言ったものであろうか。

しかし、子どもたちが大人の子想や既成概念を越えた時、そこに新しい何かがうまれる。そして教師とか子どもとかいった区別なく、真実の共感や、満ち足りたやわらかな心持ちが残る。

いつの頃からだろうか、私は、願っているままで導かれるように活動がわき出てくる驚きと楽しみを、体験することができるようになった。日々の生活から、まるで生きるもののように、子どもたちも私にも、心から共感し合えるものがうまれてくるのである。

空箱製作をしていたM子が「空とふうさぎ」を作った。すると他の子どもたちも次々に夢を語り出し、私達はファンタジーの世界に遊んだ。何日か後、園外保育の自然の中で、全く思いがけない体験が重なり合って、「ふしぎな森」というお話ができた。さらにこの話を、年少組の子どもや母親にも見せてあげたい、という気持ちが生きてきた。さらにもうまれた。お話作りや劇の世界で生き生きする子ども。紙芝居を描く時に楽しそうだった子ども。役割を決めるところで眼が輝いた子ども。それぞれの子どもの、内から溢れ出る充実感は、いつも温かくやさしい。それらは子ども同士、そして、私に生きる力を与える。

子どもたちと日々を創る生きがいも、ゆっくり心穏やかに待つことから生まれるようになり、私自信の生活のテンポもゆるやかに変わった。「温泉」という二字が身近になった。

(神奈川県立教育センター)